

香港における中国語研究の動向

飯田真紀

1. はじめに

本稿は筆者が香港中文大学中国文化研究所の客員研究員として2000年夏より香港に研究留学する期間中、現地の中国語研究に携わる研究者との交流及び研究機関の提供する情報をもとに、香港における現在の中国語研究の概況について報告を試みたものである。

以下では専ら学術研究の主な担い手である大学を単位として紹介していくが、研究者の紹介だけでなく、それぞれの大学で開講されている中国語学関連の授業についても概略報告する。これは開講科目と各大学の研究傾向とが密接に関連していることによる。研究者紹介においては原則的に各研究者の専攻分野のほか、紙幅の許す限り論著も挙げる。

しかしながら、全体像を明らかにするべく、なるべく多くの研究を紹介しようと欲張ったあまり、中国語研究の範囲の規定に明確で一貫した観点が欠けてしまっている。また筆者自身の学識不足から、自分の専門から遠い分野の研究の紹介が不十分になり、特に研究者紹介においては一貫性、公平性を欠き、現代語研究に偏っている点があることを初めに断っておきたい。

また、各研究者の論著紹介の取捨については以下の原則による。1. なるべく筆者が目を通したものを挙げ、目に触れた論著については概要を付す。2. 全く目を通していない論著についてはなるべく近年に発表されたものを掲げる。3. 応用的研究よりも学術的基礎研究を選ぶ。このような主観的基準によって選択をしたため、必ずしも各研究者の代表的論著でない可能性があることを先に断っておく。

(2)

以上様々な点において不完全で主観的な報告ではあるが、日本では香港の中国語研究の動向は部分的にしか知られていないため、日本の中国語研究者に対して自身の知り得る限りにおいて香港の研究動向を紹介するのは、香港に身を置く機会を得た筆者の責務であろうかとも思われる。

2. 大学・研究機関

2.0. 導入

各大学の授業科目・研究者の紹介に入る前に、日本のそれとは異なる香港の大学教育制度について簡単に説明をしておきたい。

香港の学制はイギリスに倣い、小学校6年、中学7年（後半の2年間は大学予科）、大学3年となっている。その後、大学院修士課程は各大学とも人文科学系の研究科については文学修士（Master of Arts：略称 MA）と哲学修士（Master of Philosophy：略称 Mphil）の二種類の学位専修に分かれる。前者はコースワークを主体とした応用的、職業的専修で、後者は学術的、基礎的研究を重視し、レベルの高い学術論文執筆が要求される。原則的に後者のみが哲学博士（PhD）学位専修へと進むことができる。

Mphil コースは PhD コースと同様、個人の主体的研究に重点が置かれており、多くの大学においては MA コースのような明確な授業科目履修の義務がない。そこで、以下で紹介する各大学の授業は専ら学部生と MA コースの院生のために 2001 年 9 月から翌年 9 月までの 1 年間に開講、または開講が予定されているものと理解されたい。また中国語学関連のものだけでなく言語学一般に関わる科目も適宜参考に掲げる。

2.1. 香港大学

2.1.1. 中文系

香港大の中文系は言語、文学だけでなく、他に哲学、歴史、翻訳といった専門分野が含まれていることに特色がある。

[授業] 文字学、音韻学、現代中国語、中国語コミュニケーション。

[研究者]

單周堯は音韻、文字、訓詁、中国語方言、左伝の研究に従事し、〈章炳麟《小學答問》・序評朱駿聲語管窺〉《第一屆國際暨第三屆全國訓詁學學術研討會論文集》327-332 (1997) などの論文がある。

李家樹は現代中国語、中国語教育などの研究を行い、論文には〈一九九七年香港回歸之後的教學語言〉《東西方文教的橋梁——國際華文教育會議文集》233-240 (1997) がある。

陳遠止は中国語書記体系などを研究し、謝耀基、李家樹との共著《漢語綜述》香港大學出版社 (1999) がある。

謝耀基は現代中国語の語彙・文法・修辭、言語教育を研究し、〈香港的多元文化現象與港式中文〉《方言》3,174-177 (1997) などの論文がある。陳萬成は詩、翻訳が専門であるが、莫慧嫻との共同執筆論文〈近代廣州話裏的“私，師，詩”〉《第二屆粵方言研討會論文集》72-78 (1990) にて19世紀の広東語資料を用いて広東語の三組の声母の変遷を論じている。

全体的に、文字・音韻・訓詁といった伝統的古代中国語研究が多く、現代中国語については教学的志向が強い。

2.1.2. 言語学系

言語学系は97年に英文系から独立してできた香港初の言語学科である。

[授業]

〈一般言語学関連〉音声学、音韻論、統語論、意味論、言語類型論、バイリンガリズム、会話分析、実験音声学、心理言語学など

〈中国語関連〉英語と中国語の比較文法、言語と方言、広東語の歴史と構造

[研究者]

陸鏡光の研究対象は談話・会話分析、中国語方言学、社会言語学、英語中国語の対照言語学など多岐に渡る。博士論文 *Utterance Particles in Cantonese Conversation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins (1990) は

(4)

会話分析の手法を用いて広東語の3つの語気詞の基本的な性質(意味)を明らかにした。また広東語口語資料のコーパスの構築に携わり、論文〈粵語中“得”字的用法〉《方言》3,215-220(1999)はそこから得られた豊富な例文を引用する。

Stephen Matthewsは統語論・意味論、類型論などに関心がある。葉彩燕と共同執筆の*Cantonese: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge. (1994) (『広東語文法』千島英一・片岡新共訳:東方書店2000)は広東語の包括的記述文法書であるが、一般言語学研究者だけでなく広東語研究者の間でも広東語文法について参照するには必須の文献となっている。他に広東語における主題化の動機について心理言語学的実験による証明を傍証に論じた Louisa Yeung との共同執筆論文“Processing motivations for topicalization in Cantonese” K. Horie & S. Sato (eds), *Cognitive-Functional Linguistics in an East Asian Context*. 81-102 (2000)がある。

李蕙心(Lee Wai-sum)は北京語・広東語・上海語といった中国語方言の音声・音韻に関する共時的・歴史的研究を専門にし、論文には“An articulatory and acoustical analysis of the syllable-initial sibilants and approximant in Beijing Mandarin”. J. J. Ohala etc. (eds.) *The Proceedings of the 14th International Congress of Phonetic Sciences*, 413-416 (1999)がある。

2.2. 香港中文大学

2.2.1. 中国語言及文学系(中文系)

[授業]

実用文法、文字学導論、音韻学、一般言語学、応用言語学、粵語研究と応用、香港語文教学專題、訓詁学、中国語文法、古文字学と古籍研究。

[研究者]

張雙慶は方言学、文字音韻学などを研究し、後述の中国文化研究所吳多泰中国語文研究中心副主任を兼ねる。香港では数少ない方言調査者であり、香港新界の村落の方言調査のほか、近年は広東省北部の「土語」(分類帰属が不

明な方言)の調査に取り組んでいる。主編著書に《樂昌土話研究》廈門大學出版社(2000)がある。

張光裕は古文字学、古文献学などを専門とし、《郭店楚簡研究》藝文印書館(1999)という著書がある。

徐正儀は文法、一般言語学、文字学を研究対象とする。著書《兩文三語:語法系統比較》台灣學生書局(1999)は普通話、広東語、英語の文法体系全体を比較概観したものである。

黄坤堯は音韻・訓詁などを研究しており、《〈史記〉三家注的重紐現象》《中國語言學報》9,174-190(1999)という論文がある。

黄耀堃は音韻、韻文研究、敦煌文献を研究し、《四十年代粵方言の高入聲》《方言》1,36-39(2001)などの論文がある。

陳雄根は訓詁、文字学、文法を研究対象とし、論文には〈釋“旨”〉、《第三屆國際中國古文字學研討會論文集》833-850(1997)がある。

また、中文系では北京大学と共同で《中文學刊》という定期刊行物を出しており、中には中国語中国文学に関する多くの学術的論文が収録されている。

2.2.2. 現代語言与文化研究学系

98年に英文系から独立して設立されたこの学科は名前の通り言語学のほかに相互文化研究が専攻できる。

[授業]

〈言語学関連〉現代言語学探索、言語習得、言語文化習論(社会言語学)、バイリンガル専題、当代中国語言語学専題。

[研究者]

顧陽は生成文法、形式主義統語論、統語論と形態論のインターフェイスの問題を研究対象とする。中国語の定位動詞(“掛、放”など)が場所を主語に取る存現文を生成する過程での項構造における操作を論じた〈論元結構及論元結構變化〉《配價理論與漢語語法研究》141-155(2000)などの論文がある。

蔣平は音韻理論、プロソディー形態論、話し言葉の認識などを研究対象と

(6)

する。〈漢語諸方言聲調分布的優選解釋〉《雙語雙方言與現代中國》134-153 (1999) は、中国語諸方言における声調調型の分布に見られる非対称性を、最適性理論を応用して、調型に関する3つの制限の排列の方言ごとの異なりに帰し、銀川方言と広州方言を具体例として説明しようとする。

葉彩燕 (Virginia Yip) は言語習得、バイリンガリズム、広東語文法、文法理論を研究テーマとする。著書には S. Matthews との共著 *Cantonese: a Comprehensive Grammar* のほか、*Interlanguage and Learnability: from Chinese to English*. Amsterdam: John Benjamins. (1995) がある。S. Matthews との共同執筆論文“The Structure and Stratification of Relative Clauses in Contemporary Cantonese,” H. Chappell (ed.), *Synchronic and Diachronic Perspectives on the Grammar of Sinitic Languages*. Oxford University Press (近刊) では、広東語の2種類の関係節構造がレジスターによる使い分けをもった異なる二つの層に属する言語形式であると主に述べられている。

また鄧慧蘭 (Gladys Tang) は香港の手話言語などを主な研究対象としている。

2.2.3. 中国文化研究所吳多泰中国語文研究中心

中文系の張雙慶が副主任を務めるこのセンターは中国語方言研究に重点を置いている。主な研究プロジェクトの一つに、中国東南部方言の比較研究計画があり、文法を中心とする特定のテーマについて毎年討論会が開かれ、その成果はこれまでに張雙慶などが主編の《動詞的體》(1996)、《動詞謂語句》(1997)、《代詞》(1999)、《介詞》(2000) といった論文集に表れている。また国際閩方言学会の主催を通じて閩語研究の分野を主導する役割も担っている。また定期刊行物として《中国語文研究》と《中国語文通訊》を刊行しており、前者は学術性の高い論文を多く収録する。

2.3. 香港科技大学

科技大において中国語研究に携わっている人文学部は言語学のみならず各領域の専門分野が設けられており、また大学院のみで学部がないため、他と異なり、大学院生 (MA、Mphil、PhD) も一定程度の科目を履修する義務がある。

[授業]

英語と中国語におけるメタファー、中国語文法導論、中国の言語・ロジック・科学、広東語学演習、中国語歴史文法、中国語音韻論演習、中国語方言学演習、シナチベット言語学導論

[研究者]

丁邦新は言わずと知れた中国語方言学、音韻論、シナチベット言語学を専門とする中国語学界の重鎮である。方言、音韻などに関する主な論著を収録した《丁邦新語言學論文集》商務印書館・北京 (1998) のほかに、近年の論文には〈上古音聲母*g 和*y在閩語中的演變〉JCL Monograph Series No. 14,247-261 (1999) などがある。

張洪年は広東語言語学、歴史文法などを研究対象とする。修士論文《香港粵語語法的研究》香港中文大学 (1972) は構造主義的観点から特に広東語の動詞句構造について中心的に分析しており、出版からほぼ30年経過した現在でも必ず引かれる広東語文法の經典的存在である。近年は広東語の歴史的研究に取り組み、広東語の完了アスペクトマーカーの変遷について19世紀以降の広東語資料を用いて論じた“Completing the Compleitive: (Re) constructing Early Cantonese Grammar” *Studies on the History of Chinese Syntax*. JCL Monograph Series No. 10,133-165 (1997) などの論文がある。

張敏は中国語歴史文法、方言学、中国語の認知文法研究に取り組んでいる。著書《認知語言學與漢語名詞短語》中國社會科學出版社 (1998) は認知言語学理論の紹介及び中国語の修飾構造に現れる助詞“的”の問題への同理論の応用が中心となっている。“Syntactic Change in Southeastern Mandarin: How Does Geographical Distribution Reveal A History of Diffusion?”

(8)

Ting Pang-Hsin and Anne O. Yue. (ed.) *Memory of Professor Li Fang-kuei: Essays of Linguistic Change and the Chinese Dialects, 197-242* (2000) は博論以来のテーマ、反復(中性)疑問文を取り上げ、異なる層に属す形式の相互作用がもたらす双方向拡散が文法現象にも観察されることを証明しようとする。

朱曉農は中国語歴史言語学、方言学、音韻論、実験音声学、論理学の分野に関心があり、〈上海方言的重音模式〉《中國語言學的新拓展——慶祝王士元教授六十五歲華誕》香港城市大學(1999)などの論著がある。

また、2001年秋現在は梅祖麟が客員訪問しており中国語歴史文法の授業を担当している。科技大の中国語研究の特徴は歴史的研究に比重を置いていることである。

2.4. 香港城市大学

2.4.1. 中文・翻訳及語言学系

この学科では中国語、言語情報科学、翻訳の3種類の学士号が用意されている。

[中国語専修の授業]

言語学導論、コンピューターと言語、古代中国語、中国語修辞学など

[言語情報科学専修の授業]

統語論、意味論、音韻論、語用論、テキスト言語学、コーパス言語学、コンピューター言語学、機械翻訳など(開講状況は不明)

MA コースでは言語学、言語と法律、翻訳と通訳の3種類の文学修士号が用意されている。

[言語学専修の授業]

〈言語学関連〉音韻論、統語・形態論、意味論、認知文法、歴史言語学、言語普遍性と類型論など(開講状況は不明)

〈中国語学関連〉中国語言語構造。

[研究者]

鄭錦全 (Cheng Chin-chuan) はコンピューター言語学、方言学を専門とする。大量の方言データの様々な計算を通じ、従来印象的に捉えられてきた中国語方言間の相互理解度を客観的に測量しようという、中国語方言分類への量的分析への試みに取り組んでおり、その方面の論著には〈漢語方言溝通度的計算〉《中國語文》238,35-43 (1994) などがある。

徐雲揚 (Eric Zee) は中国語方言の音声学・音韻論研究、実験音声学などの研究に従事している。論文には19世紀以来の香港広東語の音声・音韻的変遷について歴史資料、社会言語学的データ、実験音声学資料を用いて詳細に論じた“Change and Variation in the Syllable-Initial and Syllable-final Consonants in Hong Kong Cantonese” JCL Vol. 27, No. 1,120-167 (1999) がある。

陳淵泉 (Matthew Chen) は中国語方言や音韻理論研究に多くの著作がある。著書に *Tone Sandhi: patterns across Chinese dialects*. CambridgeUK/ New York : Cambridge University Press (2000) がある。

王士元は電子工程學系との兼任所属である。1969年以降、中国語方言の例を傍証に語彙拡散理論を打ち出し、新文法学派の唱える音韻変化例外なし説に修正を突きつけたことはあまりにも有名である。近年は言語工学、進化と言語といった研究分野に関心を寄せており、“Linguistic diversity and language relationships,” James Huang & Audrey Li (ed.) *New Horizons in Chinese Linguistics*, 334-85 (1995) には中国諸方言の分類法について言及がある。

徐烈炯は言語理論、統語論、意味論を専門とし、特に生成文法の枠組みで中国語の様々な文法テーマを論じた論著が多い。また、方言文法にも関心があり、主題優先という上海語の類型特徴に動機づけられて執筆した《話題的結構與功能》上海教育出版社 (1998) は劉丹青との共著になる。邵敬敏との共著《上海方言語法研究》華東師範大學出版社 (1998) は特定の文法現象に関する論文が収録されている。

李行徳 (Thomas Lee) は言語習得、統語論・意味論を研究テーマとする。

(10)

特に生成文法の唱える普遍文法概念の解明に動機づけられた幼児の言語習得問題について関心が高く、Ann Law との共同執筆 “Epistemic Modality and the Acquisition of Cantonese Final Particles”, Mineharu Nakayama (ed.) *Issues in East Asian Language Acquisition*. Tokyo: Kuroshio Publishers. 67-128 (2001) などの論著がある。また広東語を話す幼児の言語のコーパスの構築にも携わっている。(http://humanum.arts.cuhk.edu.hk/~cancorp/で閲覧が可能)

鄭定歐は語彙論、対照言語学、社会言語学、応用言語学などの研究を行い、論文には〈語言變異——香港粵語與廣州粵語比較研究〉《中國語文》1,56-65 (1998) などがある。

廖國輝は社会言語学、音韻論、歴史言語学、対照言語学を研究し、論文に〈香港原居民哭歌子的非漢語成分——一個語言底層研究的案例〉單周堯 陸鏡光主編《第七屆國際方言研討會論文集》《方言》增刊, 93-117 (2000) がある。潘海華は統語理論、意味論、コンピューター言語学、機械翻訳を専門とする。蔣嚴との共著《形式語義學引論》中国社会科学出版社 (1998) は様々な論理学的概念を用いて文の意味の解明を目指す形式主義意味論を中国語の例を引きつつ解説する。他に、“Imperfective Aspect Zhe, Agent Deletion, and Locative Inversion in Mandarin Chinese”, *Natural Language & Linguistic Theory*, Vol. 14, No. 2, 409-432 (1996) などの論文がある。

掲春雨 (Kit Chunyu)、蘭蓀 (Caesar Lun)、黎邦洋 (Tom Lai) はいずれもコンピューター言語学を主な専門とし、Randy LaPolla はシナ・チベット言語学、機能主義統語論などを主な研究対象とするが、それぞれのアプローチから中国語に取り組んだ研究がある。城市大は情報科学技術を生かして豊富なデータを処理し、それを元に理論を構築するタイプの研究が多い。

2.4.2. 語言資訊科学研究中心

このセンターは中文・翻訳及言語学系兼任所属の鄒嘉彦 (Benjamin T'sou) を主任とする研究機関で、主に情報科学技術を導入した中国語の計量的研究

に取り組んでいる。研究プロジェクトの一つに、香港、マカオ、上海、台湾、シンガポールの新聞をソースとした大量の中国語書面語データベースの構築がある。

鄒嘉彦は社会言語学、コンピューター言語学、歴史言語学を研究対象とし、論文には L. Z. Feng. との共同執筆《漢語（五地）與日語新概念詞語對比研究——從新聞視窗看詞彙衍生與重整》C. F. Sun (ed.), *Proceedings for the 10th North American Conference on Chinese Linguistics*, 634–651 (1998) などがある。

2.5. 香港理工大学

2.5.1. 中文及双語学系

この学科では中国語及び翻訳学、それに語文及びコミュニケーション学の2種類の学士号が用意されている。

[授業]

現代中国語、対照分析（以上、前者のコース専修用）、広東語分析、標準中国語分析。

MA コースでは中国言語学の文学修士号を設けている。

[授業]

現代中国語、社会言語学、中国語応用研究、言語接触、中国語教学、中国語と情報科学技術、広東語研究、中国語心理言語学。

[研究者]

張群顯は中国語と情報科学技術、音声学、音韻論、文字の理論・実用的研究に従事し、張日昇との共著〈從現代方言看内外轉〉《中國境内語言暨語言學第一輯 漢語方言》(1992) などの論文がある。

Robert Bauer は音声学、音韻論、中国語の方言学、社会言語学をテーマとし、Paul K. Benedict との共著 *Modern Cantonese phonology*. (Berlin ; New York : Mouton de Gruyter, 1997) は広東語における音声・音韻現象を広範囲に取り上げた包括的・網羅的記述である。

石定栩は中国語・広東語の統語論、中国語教育法、言語接触や言語変化に関心があり、“The Nature of Chinese Verb-Reduplication Constructions” *Studies in the Linguistic Sciences*, Vol. 26, 271-284 (1998) などの論文がある。

馮淑儀 (Roxana Fung) は広東語の文法・意味分析、歴史言語学、中国語教育に関心がある。博士論文 *Final particles in Standard Cantonese: Semantic extension and pragmatic inference*. (2000) は広東語の 25 個の語気詞のうち互いに近似した意味を共有するものを大きく 3 つの類へと帰納し、広東語語気詞の体系的な分析を試みている。

蔣殿は意味論、語用論、ディスコース、翻訳の分野に従事している。潘海華との共著《形式語義學引論》(上述)のほか、論文には反実仮想文の文法意味特徴と中国語におけるその特徴を論じた〈漢語條件句的違實解釋〉《語法研究和探索 十》257 - 279 (2000) などがある。

鄧思穎は広東語を初めとする中国語方言の文法や英語と中国語の対照文法研究などに取り組んでいる。〈粵語被動句施事者的省略和“原則與參數語法”〉《中文學刊》2, 243-260 (2000) は生成文法の手法を応用して広東語の受動文の特徴を論じる。他に、広東語の二重目的語構文を中心に論じた “On the ‘inverted’ double object construction” *Studies in Cantonese Linguistics* 35-52 (1998) などの論文がある。

2.6. その他の教育機関

香港浸会大学中文系の周國正には〈古漢語否定詞中的標記性對比〉《中文學刊》2, 1-16 (2000) など古代・現代中国語の文法についての論文がある。また、同学科の宗靜航は音韻、文字、訓詁の分野を主に研究している。

3. 学術組織

現在 180 人を越える香港内外の会員を抱える香港語言学会は、香港における中国語研究の活動を推進する最大の学術組織の一つである。毎年開催され

る年次大会では中国語言語学に関する発表が多数を占める。またこれまでに顧陽編 *Studies in Chinese Linguistics* (1998)、S. Matthews 編 *Studies in Cantonese Linguistics* (1998) などの論文集を発行している。その他、コンピューターの漢字入力方式と連動させた《香港粵語拼音字表》(1997) の制定は応用方面の大きな成果である。

4. おわりに

最後にごく大雑把に香港の中国語研究の特徴を述べてみたい。

各研究機関の研究動向は以上に挙げた通りであるが、研究分野について言えば、地理的・物理的条件からか、方言調査研究などに典型的に見られる記述系の研究が数少なく、理論志向型の研究が中心で、例えば文法分野では形式主義が主流を占める。また、英語と中国語を公用語にし、話し言葉では広東語をほぼ共通語とするため、バイリンガル問題や中国語能力低下問題などを抱える社会状況の反映として、純学術的中国語研究と応用的実用的研究の両方に従事している研究者が多いのも特色の一つであろう。

[参考資料]

《香港語文面面觀》費錦昌主編 語文出版社：北京（1997）

[本文中で用いた略称] JCL Journal of Chinese Linguistics

謝辞：本稿の作成に当たっては各大学の研究者や大学院生に資料の提供などの点で大変お世話になり感謝している。またインタビューに応じてくれた陸鏡光、鄧思穎、李行徳、張敏、葉彩燕、陳萬成、張雙慶の各氏（敬称略）には感謝の気持ちを述べたい。